



Title	京都陶芸界における近代化の受容 : 五代清水六兵衛を事例として
Author(s)	清水, 愛子
Citation	デザイン理論. 2006, 49, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53011
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

京都陶芸界における近代化の受容 — 五代清水六兵衛を事例として —

清水 愛子／京都造形芸術大学非常勤講師

はじめに

本発表の目的は、京都の陶芸界がどのように近代化を受容していったのかについて、個人作家が誕生する時期を中心に再考を試みることにある。陶芸の近代化が、個人作家の確立によってなされたという見解が主流である先行研究に対し、個人の作家性だけではなく、地域や時代、そして近世からの連続といった様々な要因が複雑に寄与していることを明らかにするものである。

その一例として具体的には、明和8年(1771)、京都の五条坂に茶器製造のために開窯し、現在も続く京焼の有力な窯元であり陶芸家でもある清水六兵衛家を対象とする。当家の、五代六兵衛の時期には、「やきもの」という地場産業が、芸術としての陶芸へと転換していく過渡期にあった。その中で、京都の陶芸界のリーダー的存在として活躍した五代六兵衛が、どのように近代化を受容し、陶芸家として転身していったのかを明らかにする。同時に、前近代的な「やきもの」としての京焼が、どのように近代化という社会的変化に対応していったのかといった側面から、五代六兵衛の位置づけに関して再考を試みる。

「陶芸家」としての五代六兵衛

はじめに五代六兵衛の「陶芸家」像について再考を試みる。

一陶芸家としてどのような作品を制作・出品したのか、農商務省主催の図案及応用美術展覧会(以下農展)と昭和2年に美術工芸部が新設された帝国美術展覧会における五代六兵衛の出品作品を対象とし、考察を行った。

その結果、時間軸にそって、釉薬や技法が年々変化していること、自ら開発した新しい釉薬や技法による作品を出品する一方、染付磁器や色絵陶器、青磁釉など過去の陶磁器を手本とした作品も出品するなど、多種多様な作品であることが特徴として見出せた。

以上のような特徴をみると、五代六兵衛は、個人の陶磁器に対する思想が先にあり、それをもとに一貫して制作し続けるというより、当時可能であった表現技法を駆使し、また新しい科学技術を取り入れることで、様々な陶磁器を制作することに価値を置いていたことが考察できる。

さらに、五代六兵衛による帝展の出品作品に対する心構えを見る限り、当時の新しい時代の流れに「純粹美術」としての陶芸があり、それを目指すには「創作」という新たな方法を積極的に導入する必要があると考えていたと言える。五代六兵衛の目指した「創作」は、オリジナリティーという意味より、時代に応じて新しい作品を作り続けていくことであったと考察できる。このことから、五代六兵衛は独創性をひたすら追求するというより、時代の流れを追い求め、それに適応した多様な表現スタイルを駆使してきた陶芸家として位置づけられるだろう。

科学技術による新技法・釉薬の開発

五代六兵衛が、生涯にわたり積極的に試みた近代的な科学技術をもとに開発した釉薬や技法による作品をとりあげ、五代六兵衛からみた近代化とは具体的にどのようなものであったのかについて明らかにする。

五代六兵衛は、明治29年、京都市立陶磁器試験場（以下試験場）が開設した当初より、試験場へほぼ毎日のように通い、絵の具の試験、釉薬の試験などを自由に行っていた。五代六兵衛にとって、京都市立陶磁器試験場のもつ近代的な製作方法は、新しい陶磁器を製作する際に必要不可欠な知識であり、手段であった。

五代六兵衛の新しい技法による最初の作品は、試験場の場長である藤江永孝の指導のもと研究を重ねて開発した音羽焼である。この技法は、もともとイタリアのマジョリカ焼が基礎となっている。明治から大正初期は、技術面でも装飾面でも西欧が手本とすべき対象であり、多くの技術や図案の導入が試みられていた。このような時代背景からも、音羽焼による陶磁器は、五代六兵衛の独創的な技法による作品というより、同時代に注目されていた技法研究に着手し、新しい絵付陶磁器として発表した作品であると位置づける事が出来る。昭和になると音羽焼をほとんどみることがなくなったということからも、時代性を強く反映していた技法であったといえることができる。

五代六兵衛にとって化学的な知識をもとに釉薬や技法を開発することは、時代の新しい流れに応じた作品づくりを实践する手段であった。同時代の動向を踏まえ、常に新たな作品を生み出すことが「創作」に不可欠な要素と考えていた五代六兵衛は、次々と釉薬によって新しい作風を打ち出すことで、創作性、独創性を確保し、帝展の陶芸家としての地位を築いていったのである。以上を踏まえると、技法や釉薬の開発という近代的な科学技術の導入は、六兵衛の陶芸家誕生には欠かせない重要な要素の一つとして捉えられる。

京焼を受け継いだ陶芸家

初代から四代六兵衛までの清水家歴代の作品に共通するのは、先代まで受け継がれてきた技法を基本としつつ、同時代に人気を博した技法をうまく取り入れてきたことである。

同時に五代六兵衛が開発した技法や釉薬は、彼自身が主体的に見出したというより、新しい時代の流行を巧みに取り込み、その時代を反映したものであった。以上のことから、五代六兵衛は、これまでの六兵衛家の製作スタイルに則っていたことが考察できる。

一方、結果として高度な窯業技術という近代化の恩恵を最大限活かしきったところに、五代六兵衛の陶芸の近代化に対する貢献があったといえよう。また、五代六兵衛が新たに見出した部分をいうならば、写しという近代的な手法と近代的な技術力を融合させたことにより、多様な陶芸をより一層多様にしたのではないかと思われる。以上のような点からも、五代六兵衛は京焼の近代化に貢献したが、それは個人の作家性や、創作性によるという先行研究とは異なる価値観をもっていたといえる。

おわりに

京都陶芸界の近代化の受容とは、創作や創造による陶芸制作の導入により、これまでの京焼の特質やスタイルが一掃し、個人作家による京都陶芸界へと転身するというより、陶芸家、独創性、科学的な窯業技術といった近代的要素を巧みに導入し、これまでの京焼の領域を拡張していくことにあったと考える。創作や独自性や科学技術は共に、近代的な要素として理解し、積極的に取り入れることにより、陶芸家としての地位を確保したのである。